

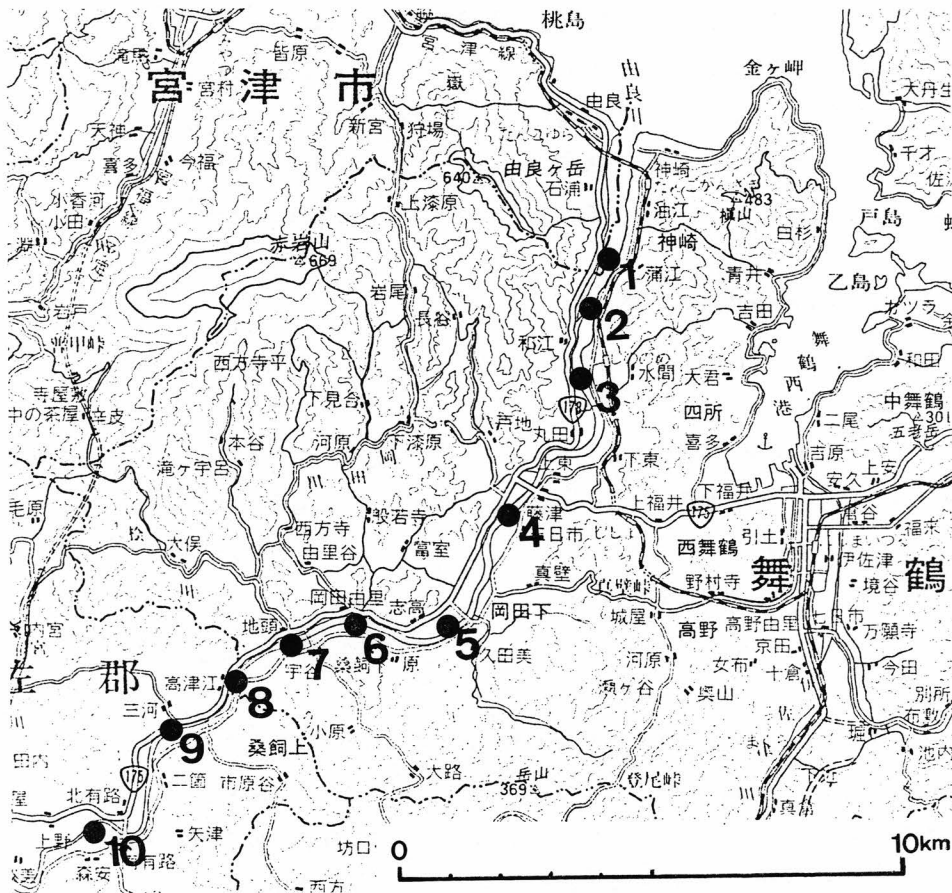
由良川下流域における縄文時代前期の土器群

——舞鶴市志高遺跡採集土器を中心として——

三 好 博 喜

1. はじめに

由良川下流域における縄文文化の探究は、1961年舞鶴市八雲付近の河底から砂利採取作業に伴い採集された土器片に始まる。^(注1) その後の丹念な調査により、現在縄文土器の出土地



第1図 縄文土器出土地点位置図

- | | | | | |
|----------|---------|----------|------------|-----------|
| 1. 城島遺跡 | 2. 和江遺跡 | 3. 八雲遺跡 | 4. 三日市遺跡 | 5. 志高遺跡 |
| 6. 桑飼下遺跡 | 7. 地頭遺跡 | 8. 高津江遺跡 | 9. 三河宮の下遺跡 | 10. 高川原遺跡 |

点は、10か所を数えるに至る^(注2)。これらの地点のうち発掘調査が行なわれた所は、桑飼下遺跡^(注3)(1973年)・高川原遺跡^(注4)(1974年)・三河宮の下遺跡^(注5)(1980年)の3遺跡である。高川原遺跡では、縄文土器片が出土したのみであるが、桑飼下遺跡では48基の炉跡をはじめとする遺構・遺物が検出された。三河宮の下遺跡でも竪穴式住居跡4基が検出され、縄文時代の集落の存在を確認した。これらの集落は後期のもので、中期以前の様相については未だ明確にされていない。ここでは1985年の春から夏にかけて、舞鶴市志高遺跡において採集した縄文土器を紹介するとともに、由良川下流域の縄文時代前期の様相を概観したい。

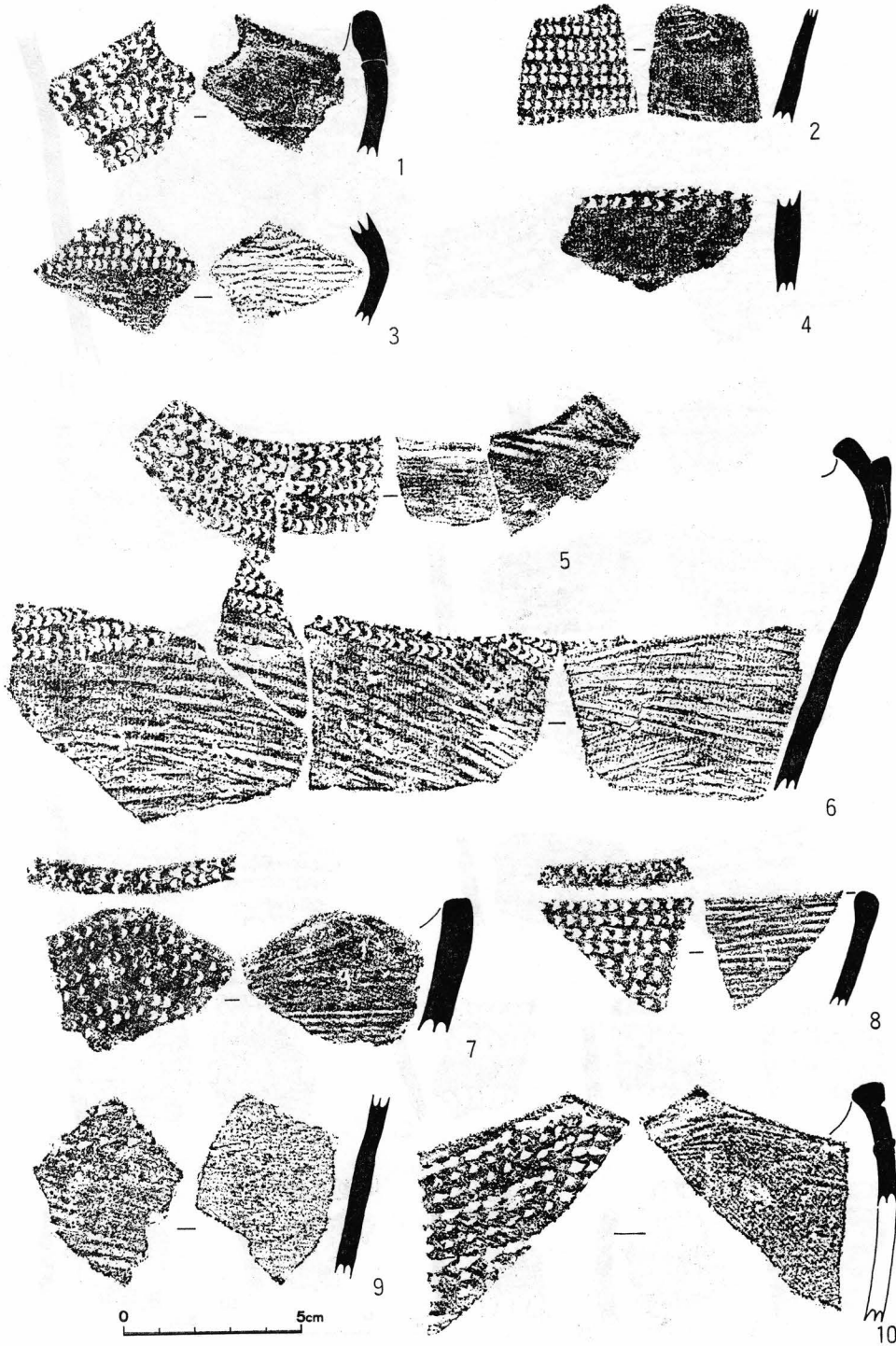
志高遺跡は、若狭湾から内陸部へ10km程入った由良川左岸の自然堤防上にある。遺跡の調査は、由良川改修工事に伴って実施されており、昭和55年度から58年度までは舞鶴市教育委員会が、昭和59年度からは財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターがそれぞれ調査主体となっている。これまでの調査により、志高遺跡は、弥生時代から明治時代に至る集落遺跡であることが判明している。主な遺構面としては、奈良時代後期～平安時代初頭・古墳時代・弥生時代の3面が存在する。現地表面からは、それぞれ1.5～1.7m・2m・2.3mの深さを測る。今回採集した縄文時代の遺物は、由良川に面した崖面に露出していた。この縄文時代の包含層は、現地表下4.5m付近^(注7)にある。採集した土器片は、前期の爪形文系土器群・条痕文系土器群・縄文系土器群などで、整理箱3箱を満たす量である。

2. 志高遺跡採集の縄文土器

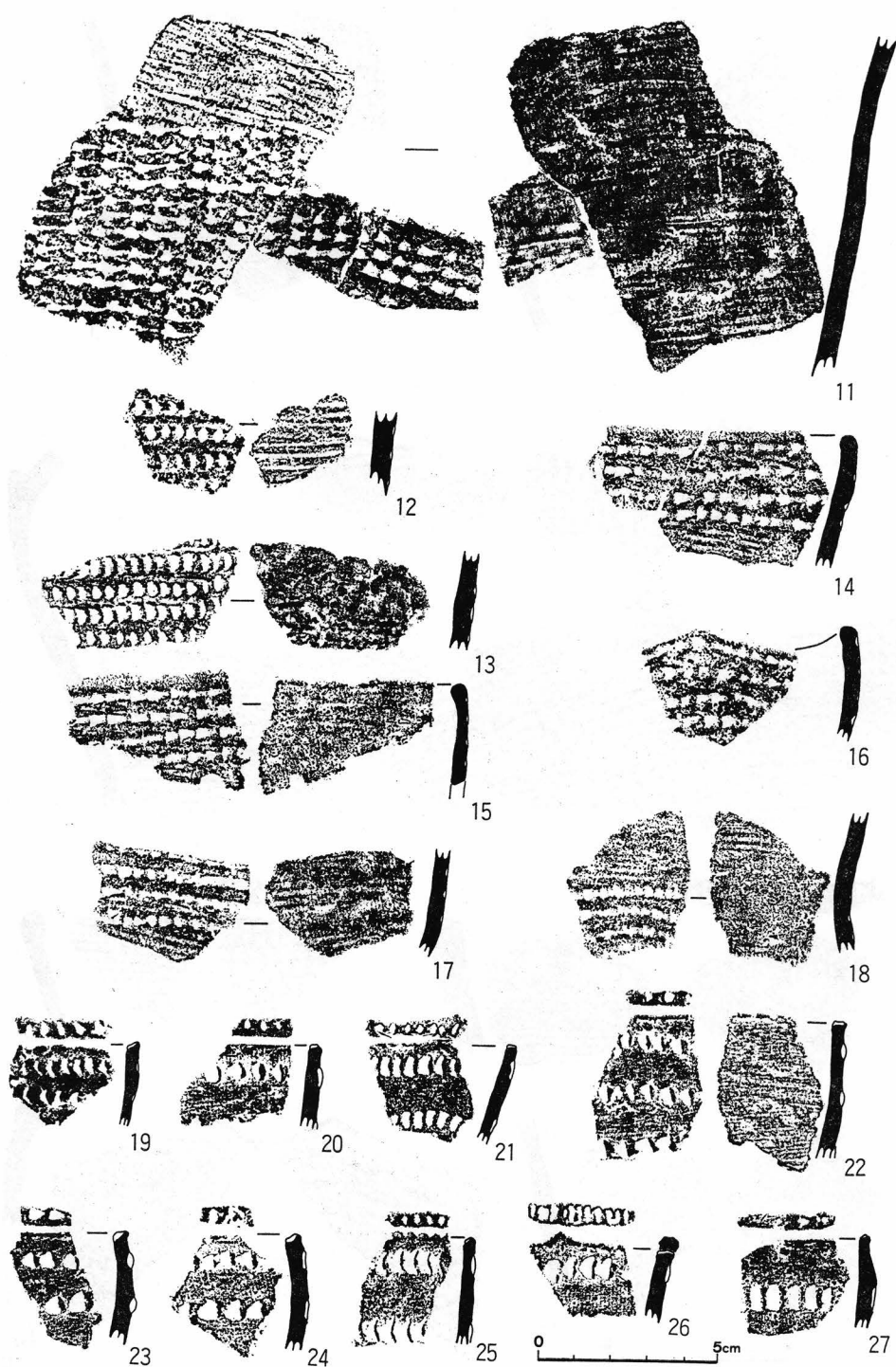
第1群(第2・3図1～11) 2連または3連を単位とする刺突文で文様帯を構成する土器の一群である。

1～4は、2連刺突文の連結が固く「3」字状を呈している。1～3の裏面には条痕調整が施される。口縁部破片の1は、口唇部を肥厚させているものの端部には特別な施文はない。1・4の胎土中には金雲母・石粒を、2・3の胎土中には黒雲母を含んでいる。7の裏面には赤色顔料の付着がみられた。

5～9は、2連1単位で1文様帯を構成しているものの2連間の結合が弱く、間隔が開いたり、上下の位置関係にズレを生じたりしているものである。いずれも裏面には条痕調整が施されている。9および同一個体と考えられる資料の5・6からは、条痕調整を施したのち刺突を加えた様子がうかがえる。口縁部破片として5・7・8がある。5は口唇部を肥厚させているものの、特別な施文はみられない。7は比較的厚い器壁のためか口唇部を肥厚させず、端部に2連の刺突を加えている。8は口唇部を肥厚させ、端部に2連の刺突を加えるものである。5・6・7・9の胎土中には金雲母・石粒を、8の胎土中には黒雲母を含む。



第2図 縄文土器拓影 (1)



第3図 縄文土器拓影 (2)

10・11は、3連1単位で1文様帯を構成するものの、結合は弱い。表裏面に条痕調整がみられる。10は条痕調整ののち刺突を加えているのに対し、11では刺突を加えたのち条痕調整を施している様子がうかがえる。口縁部破片の10は、口唇部を肥厚させているものの、特別な施文はない。いずれも胎土中に金雲母・石粒を含んでいる。

第2群(第3・4図12～55) 管状工具外側の押圧による単独の刺突文で、いわゆるD字形爪形文を文様帯とする土器の一群である。

12～18は、1列ずつの文様帯が比較的近接しており、刺突も密に行なわれているものである。特に、14～18は刺突文帯を押し引きによって施している。12・13は、裏面に条痕調整がみられ、胎土中に石粒を含んでいる。14～16は口縁部破片で、口唇部を若干肥厚させているものの特別な施文はみられない。14～18は、いずれも胎土中に角閃石を含み、14・16を除いて表裏面に条痕調整が認められる。

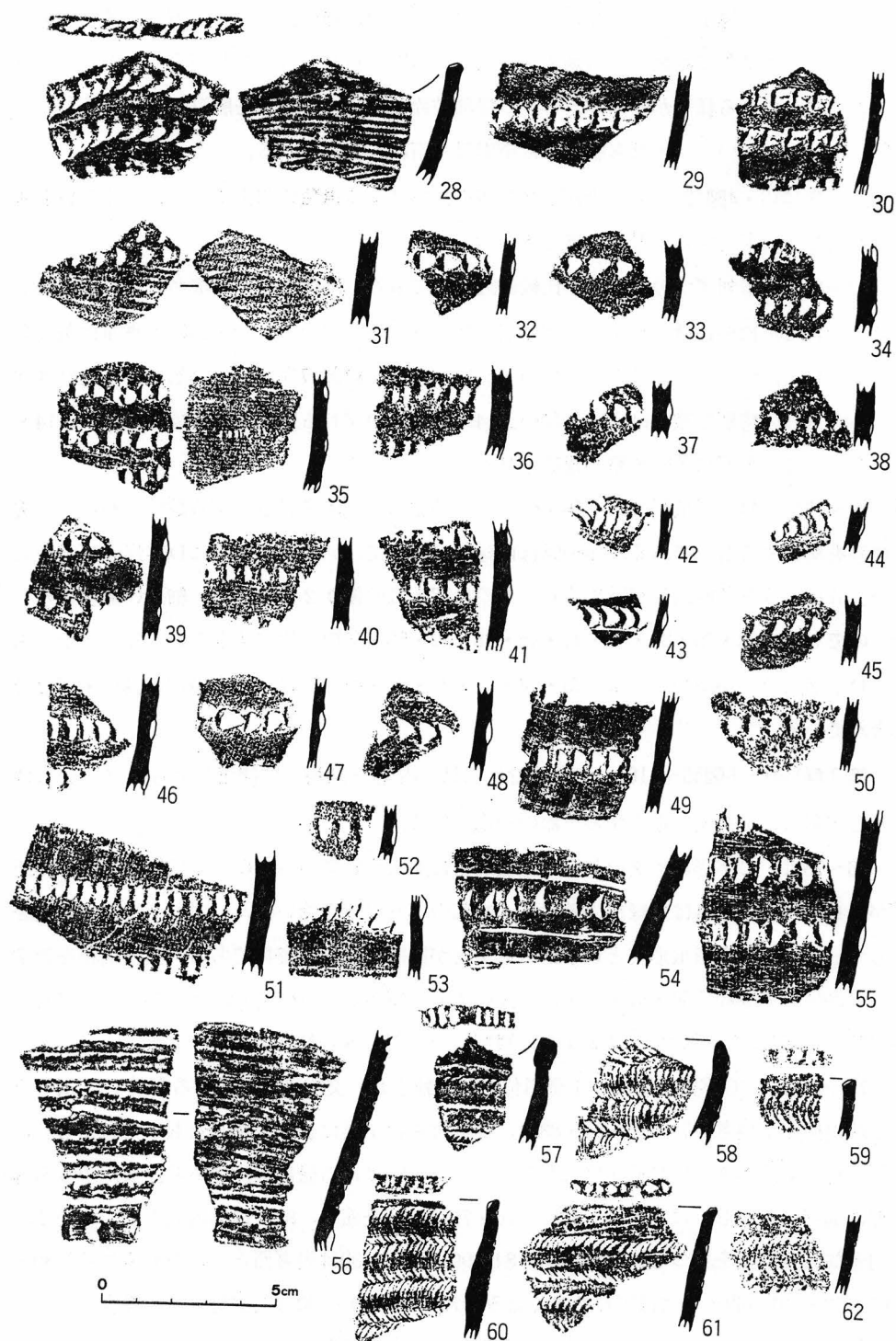
19～55は、D字形爪形文が1個単位として独立し、間隔を置きながら数段にわたって文様帯を構成するものである。19～28は口縁部の破片で、いずれも端部にD字形の刺突をもつ。37片のうち条痕調整が認められるものは28・31の僅か2片のみで、細かい擦痕の残るものでも20・22・35・39・40・41・46・48・49・53・55の11片にすぎない。35は裏面に浅いD字形爪形文が認められる。25・28・31・37・40・42・51は、胎土中に金雲母・石粒を含んでいる。

第3群(第4～6図56～116) 半截竹管状工具の内側を利用して押圧したもので、いわゆるC字形爪形文を文様帯とする土器の一群である。

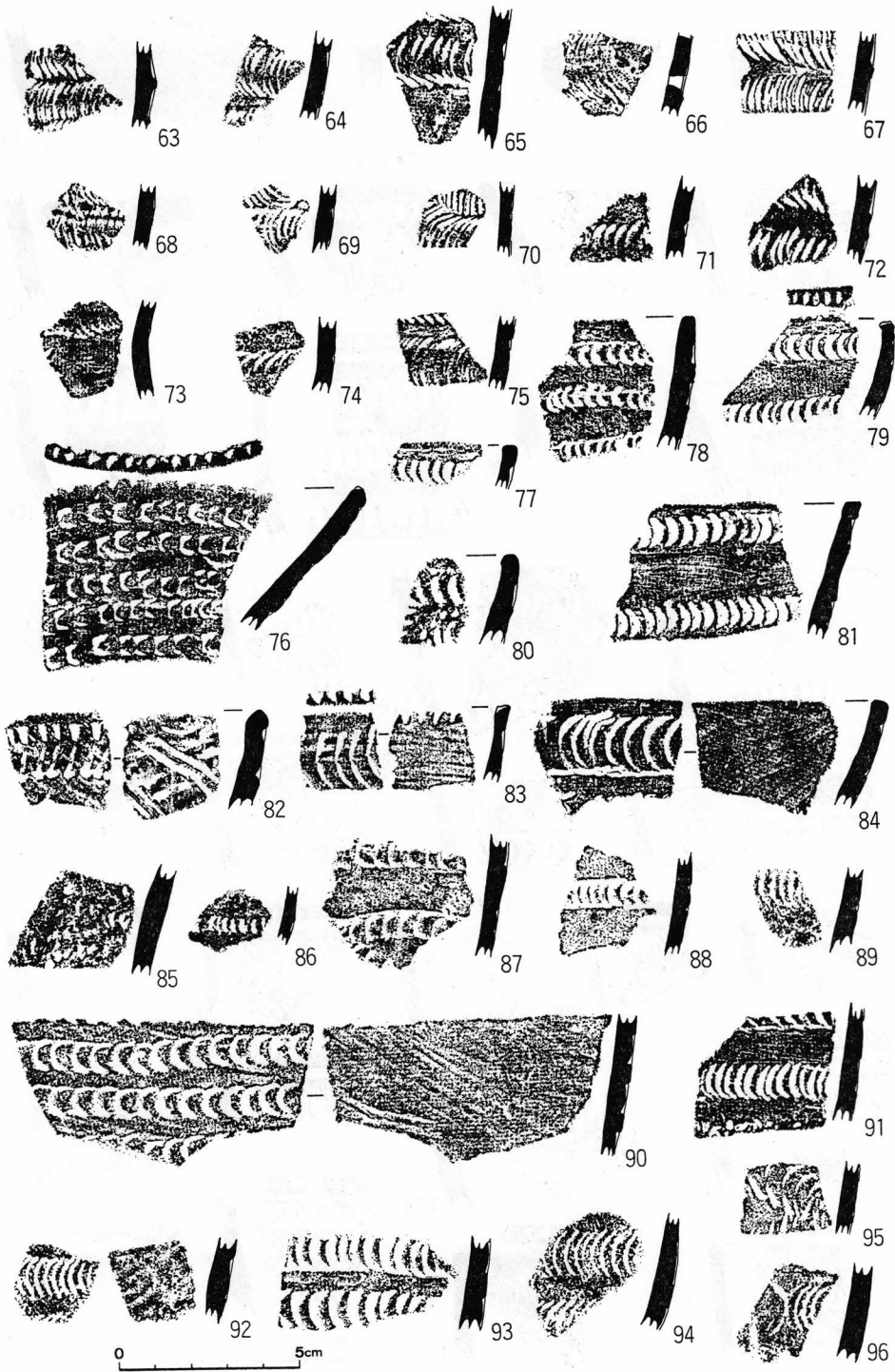
56～75は、C字形爪形文の刺突が比較的密に加えられているもので、爪形上下端の押圧が最も深い。57～61は口縁部の破片で、端部の不明な58を除いて、いずれも端部に刺突をもつ。56は、D字形爪形文とC字形爪形文とが同居している資料である。条痕調整を施すものは極めて少なく56・61・71・73に浅い条痕を認めるのみである。58・60・62には石粒が多く含まれている。66には2か所に補修孔の一部がみられる。

76～101は、C字形爪形文が1個単位として独立し、文様帯を構成するもので、爪形上下端の押圧が最も深い。76・82・83は、半截竹管状工具に加工を施したものと考えられ、他のC字形爪形文とは形態を異にしている。76～84は、口縁部破片である。9片のうち端部に刻みをもつものは76・79・83で、76・79は端部全面を、83は端部内側を刻んでいる。明確な条痕調整をもつものは82・83・84・90・92で、90は表裏面ともに認められる。80・87・92・101の胎土中には石粒を多く含み、79・88・90・100は金雲母・石粒を含む。

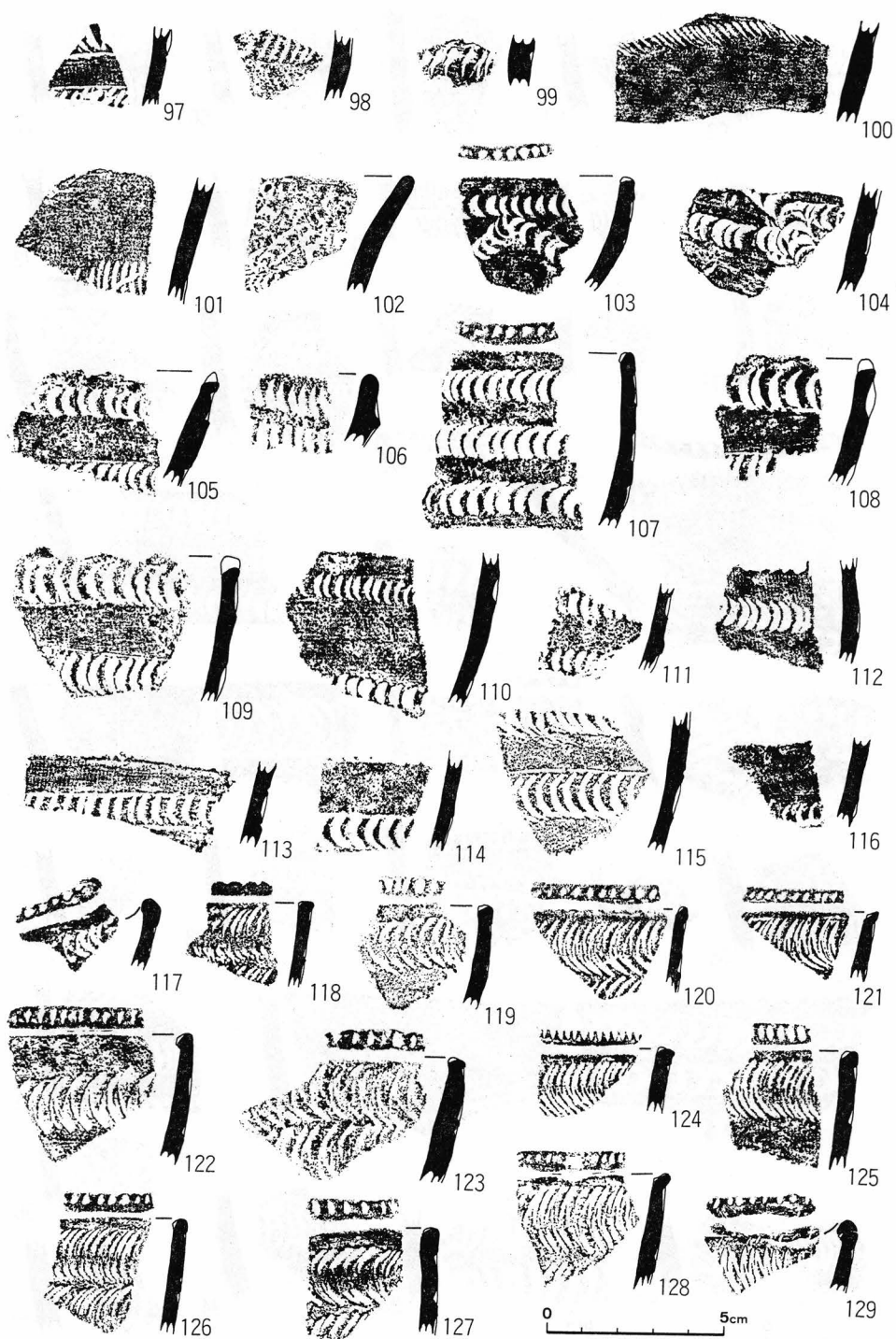
102～104は、C字形爪形文が複雑に連結されたものである。102・103が口縁部破片で、103には端部内側に刻みが加えられている。条痕調整を施すものはない。



第4図 縄文土器拓影(3)



第5図 縄文土器拓影(4)



第6図 縄文土器拓影 (5)

105～116は、C字形爪形文のうち爪形の中央部が最も深くなるものである。105～109が口縁部破片で、107のみが端部内側に刻みをもつ。105・107・108は端部を押し潰し、小さな三角形の突起を連続して作り出している。105・106・107・111の胎土中には石粒が多く含まれている。条痕調整などが認められるものはない。

第4群(第6～8図117～161) C字形爪形文を千鳥状に施した連続爪形文で文様を構成する土器の一群である。

117～129は口縁部の破片であり、一様に端部内側を刻んでいる。特に、122・123・129は口唇部を肥厚させた内側に刻みが入る。明瞭な条痕調整をもつものに134・140があり、特に、140は表裏面に施されている。144には擦痕が認められる。119・122・123・125・150・158の胎土中には石粒を含み、123には金雲母も混じる。

159～161は、連続爪形文に凸帯文が伴うものである。159は口縁部破片で、端部内側を刻む。160・161は、凸帯上を細かく刻んでいる。

第5群(第8図162～166) 凸帯下に半截竹管状工具による刺突が加えられた土器の一群である。口縁部破片のうち、165は端部全面を刻み、166は端部内側を刻む。165には胎土中に石粒が含まれる。

第6群(第8図165～184) 縄文と各種刺突文とが同居する土器の一群である。

167～177は、縄文とD字形爪形文との組合わせである。磨滅が著しい173を除くと、縄文原体は10片すべてが二段単節である。原体の撚りは、169がR $\frac{1}{L}$ 、他の7片がL $\frac{R}{R}$ である。167の縄文は、R $\frac{1}{L}$ とL $\frac{R}{R}$ との組合わせで羽状を成す。172・173は石粒を含む。176は、加工を施した半截竹管状工具を用いているため、他のD字形爪形文とは形態を異にしている。また、裏面には条痕調整が施されている。

178・179は、縄文とC字形爪形文との組合わせである。縄文原体は二段単節で、原体の撚りは178がR $\frac{1}{L}$ 、179がL $\frac{R}{R}$ である。

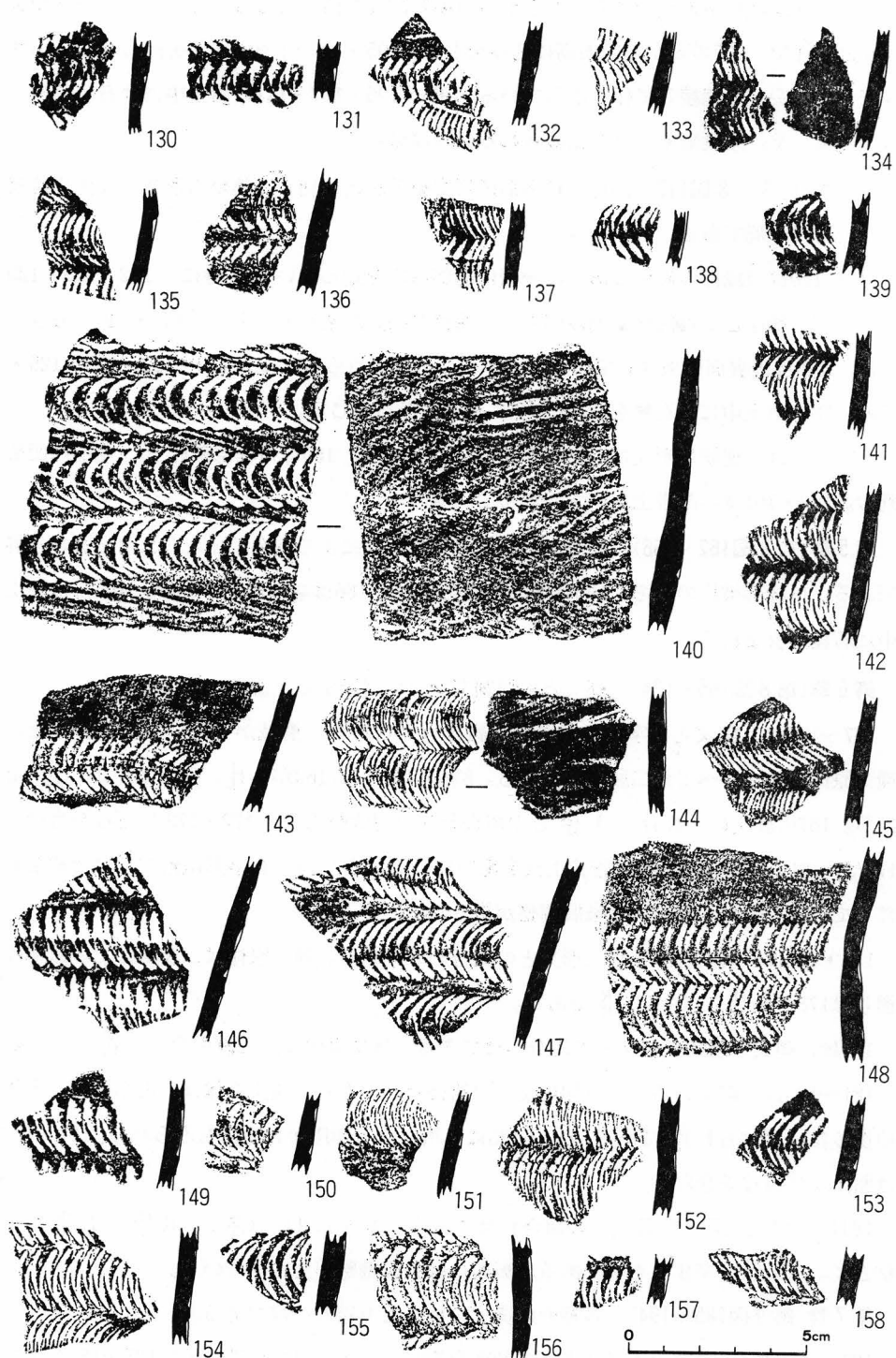
180は、縄文と連続爪形文との組合わせである。縄文原体は、二段単節のL $\frac{R}{R}$ である。

181～183は、縄文と爪による押圧文との組合わせである。縄文原体は二段単節で、原体の撚りはいずれもL $\frac{R}{R}$ である。182・183には爪による押圧が裏面にもみられる。181・182は胎土中に石粒を含む。

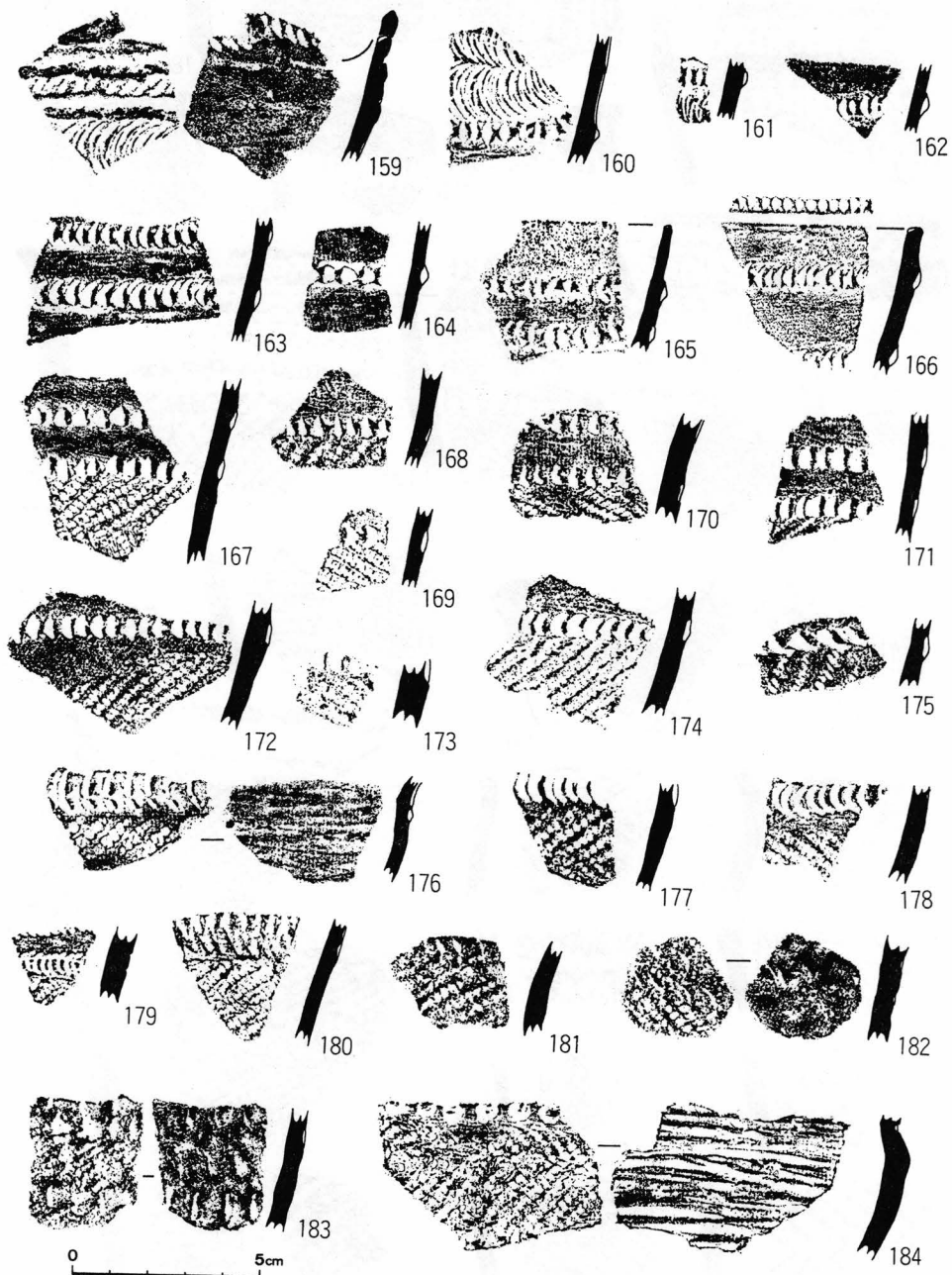
184は、縄文と円形竹管文との組合わせである。縄文は二段単節で、R $\frac{1}{L}$ とL $\frac{R}{R}$ との結合により羽状を呈するものである。裏面には条痕調整が施されている。

第7群(第9図185～194) 各種の刺突文を施した土器の一群である。

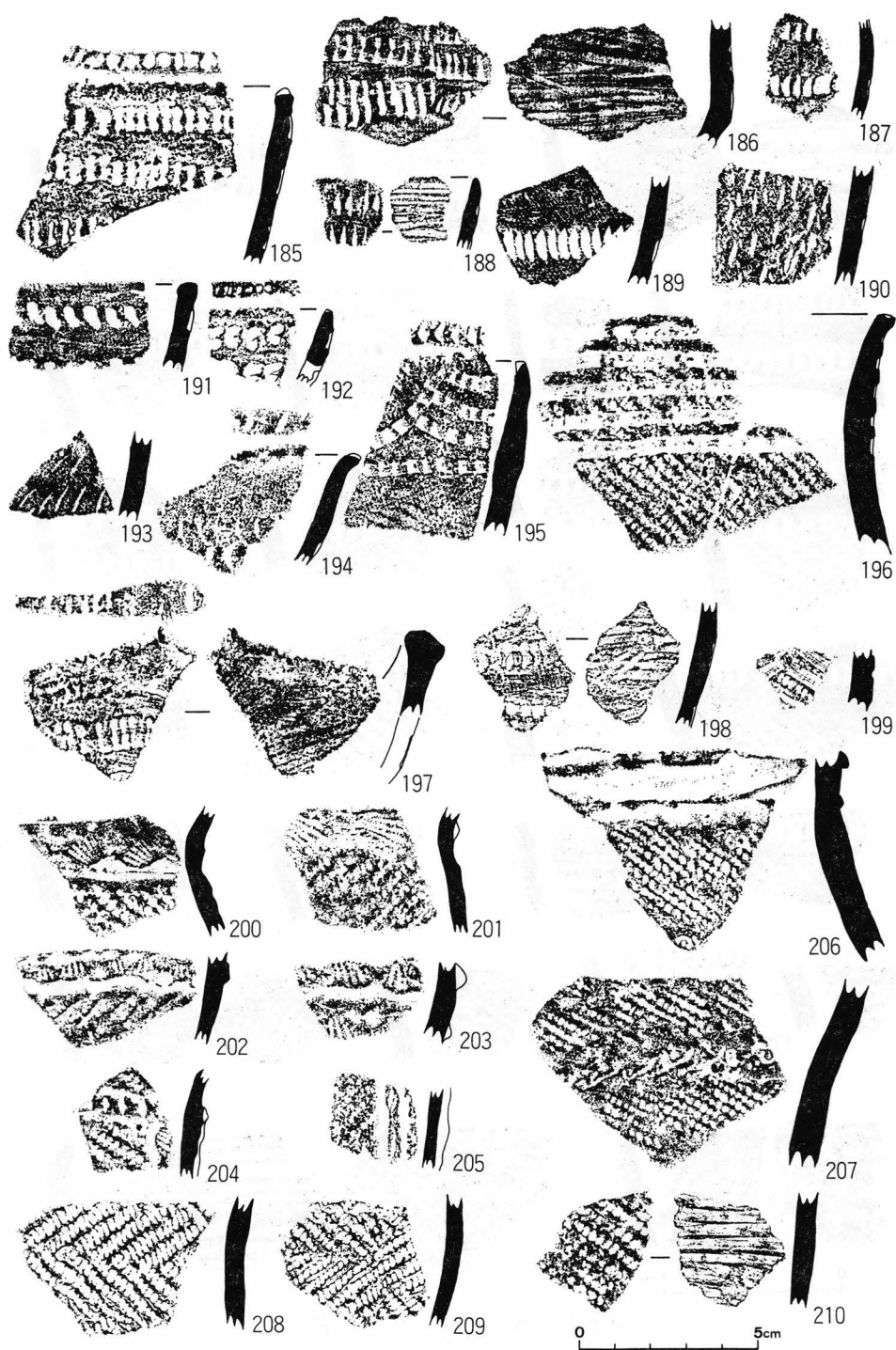
185～190は、ヘラ状の工具によって刺突を施している。口縁部破片には185・188の2片があり、185には端部にも刺突文がみられる。186・188の裏面には条痕調整が施される。



第7図 縄文土器拓影(6)



第8図 縄文土器拓影(7)



第9図 縄文土器拓影 (8)

191・192は、勾玉状の刺突を施すものである。いずれも口縁部の破片で、192は端部に浅い刺突をもつ。なお、192は補修孔をもち、胎土中に石粒を含む。

192・193は、爪による押圧文を施すものである。193は口縁部の破片で、端部に刻みをもつ。194の胎土中には石粒を含む。

第8群(第9図195～199) ヘラ状工具による押し引きにより、文様を構成する土器の一群である。

195・196・197は口縁部破片で、端部に刺突をもつ。197・198の裏面には、条痕調整が施されている。いずれも胎土中に石粒を含み、196には金雲母も含まれている。ほとんどが条痕文を地文とするなかで、196だけが $R\{L\}$ の縄文を地文としている。

第9群(第9図200～205) 貝殻圧痕文をもつ土器の一群である。

200・201は、胴部が「く」の字状に屈曲する所に貝殻圧痕文を施している。200には $R\{L\}$ 、201には $L\{R\}$ の縄文が伴う。202～205は、凸帯上に貝殻圧痕文を付すものである。204は $L\{R\}$ の縄文を地文として、凸帯上に刻みと貝殻圧痕とが同居している。いずれも胎土中に石粒を含む。

第10群(第9・10図206～221) 縄文を主文様とする土器の一群である。

216は一段無節で、原体の撚りは $L\{f\}$ である。216以外は二段単節のもので、206・207・214・219は $R\{L\}$ 、210・215は $L\{R\}$ を使用したものである。208・209・211・212・213・217・218は、 $R\{L\}$ と $L\{R\}$ との結合による羽状縄文である。214は口縁部に沈線を巡らし、凸帯を貼り付けるものである。216は、裏面に条痕調整を施している。220・221は挟り込みを巡らした底部破片で、部分的に縄文が認められる。218には一部に爪による圧痕文がみられる。ほとんどの胎土中に石粒を含む。

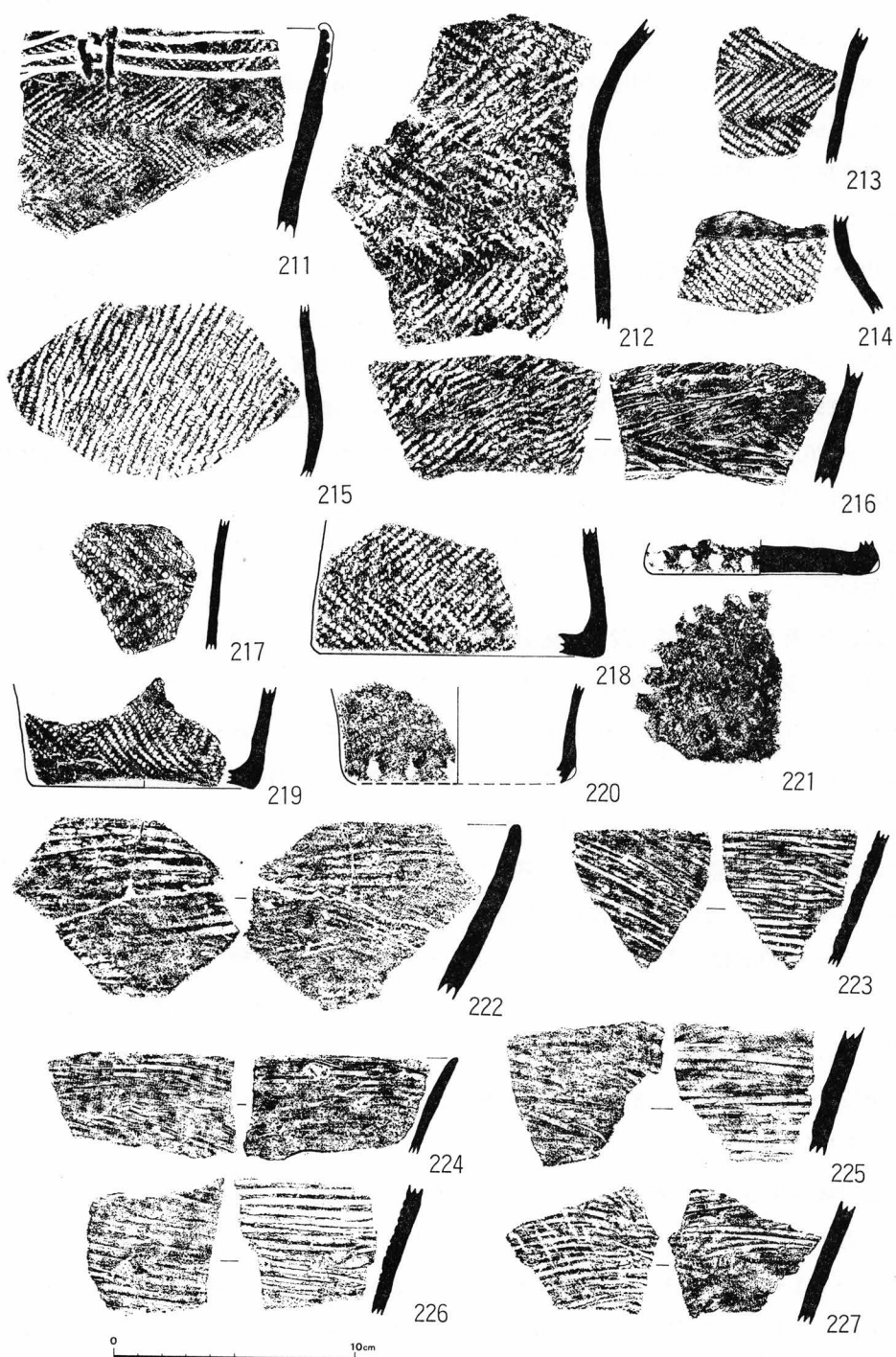
第11群(第10図222～227) 条痕文を主文様とする土器の一群である。

いずれも表裏面に貝殻腹縁による条痕調整を施し、胎土中には石粒を含んでいる。222・224には金雲母も認められる。

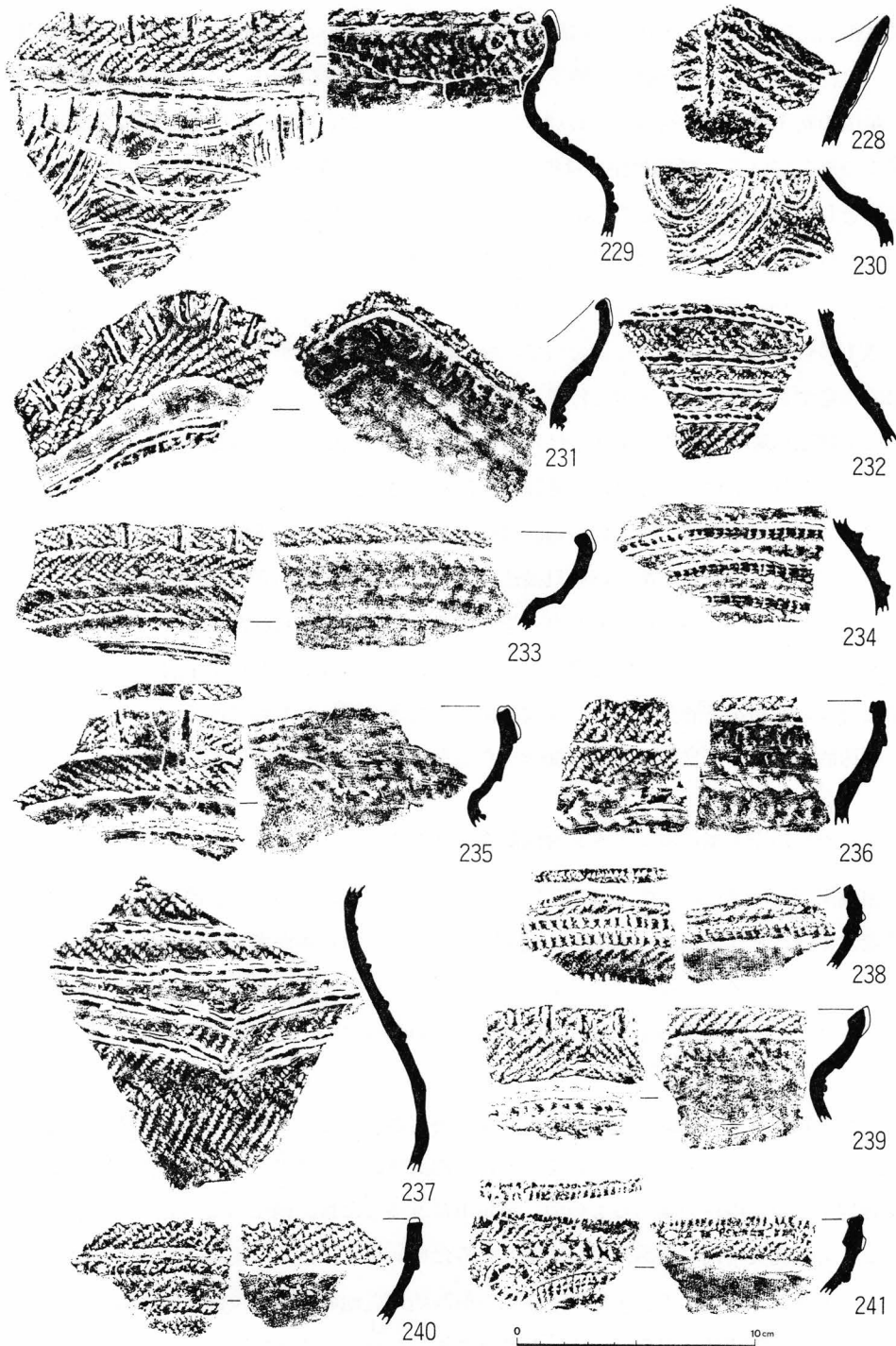
第12群(第11図228) 228は、肋骨状に配した凸帯上に縄文を押圧したもので、地文は一段無節 $R\{f\}$ の縄文である。胎土中には石粒を含んでいる。

第13群(第11図229～241) 凸帯上を細い半截竹管状工具で加飾した、いわゆる特殊凸帯文を主文様とする土器の一群である。

229・231・233・235・239は口縁部破片で、端部から短い凸帯を垂下させ、その上を細い半截竹管状工具で調整する。頸部以下に巡らされた凸帯も同様である。地文は縄文で、口縁端部にもみられる。228・231は $R\{L\}$ 、235は $L\{R\}$ の縄文原体を用いている。233・239は、 $R\{L\}$ と $L\{R\}$ との組合わせである。裏面には指頭圧痕を密に施し、爪の押圧を残す。



第10図 縄文土器拓影 (9)



第11図 縄文土器拓影 (10)

230・232・234・237は、凸帯上をΣ字状に加工した半截竹管状工具で加飾している。裏面には指頭圧痕を残す。240は、口縁端部を強く押圧して小さな台状の突起を作り出している。口縁部の内外には、幅広の粘土帯を貼り付けL $\left\{ \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix} \right\}$ の縄文を施す。236は、口縁部外側に幅広の粘土帯を二段巡らし、L $\left\{ \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix} \right\}$ の縄文を施す。口縁部内側にも細い凸帯を巡らし、縄文を施している。頸部内側には指頭圧痕、爪の押圧が残る。230・241はL $\left\{ \begin{smallmatrix} R \\ R \end{smallmatrix} \right\}$ の縄文を地文とし、内外面に巡らした凸帯上を刺突で加飾するもので、口縁端部にも刺突を加えている。ほとんどのものが胎土中に石粒を含んでいる。

以上の資料は、すべてが採集資料で、層位による前後関係が知り得ない。ここでは、土器文様をてがかりに時期比定を行なうことにする。^(注8)

第1群は羽島下層Ⅱ式、第2群は北白川下層Ⅰ式に類似する特徴をもつものである。第3群および第4群については、部分破片のため分離しがたいが、北白川下層Ⅰ式・北白川下層Ⅱ式に帰属してゆくものである。第5群・第6群は北白川下層Ⅱ式、第7群は北白川下層Ⅰ式に比定できる。第9群の貝殻圧痕文は、北兵庫の兎和野原式や瀬戸内の船元式にみられ、前期末から中期初頭のものと思われる。第10群にみられた土器底部周縁に挟り込みをもつものは、北白川小倉町遺跡に出土例がある。第11群は北白川下層Ⅱ式に属する。第12群は、北白川下層Ⅲ式あるいは大歳山式の特徴を備えたものである。これらの土器群を総体的にみると、ほとんど前期前半から前期末のものであるといえる。

3. 由良川下流域における縄文時代前期の様相

由良川下流域では、今のところ前期を遡る資料は知られていない。前期の遺物を出土する遺跡には、和江・八雲・志高・地頭・三河宮の下^(注9)の5遺跡がある。出土量は、志高遺跡を除くとあまり多くはない。このなかで古い様相を示す土器として、志高遺跡の第1群土器があげられる。同種の土器は、和江遺跡でも報告されている。他の遺跡は、これよりも新しい段階から始まるものである。

出土遺物の内容や数量から考えて、前期の集落が存在したと推定できるのは、志高遺跡と三河宮の下遺跡とである。立地をみると、志高遺跡が自然堤防上、三河宮の下遺跡が洪積台地上と多少の違いはあるものの、由良川に近接した微高地にある点で変わりがない。

ここでは縄文時代の生業について触れてみたい。まず、後期の集落跡である桑飼下遺跡についてみることにする。由良川下流域の微高地に立地するこの遺跡は、発掘調査の結果、盛んな植物採集活動に支えられていたことが知られた。^(注10) 石器組成に占める打製石斧の率が著しく高いため、自然堤防を舞台とした植物採集活動を経済基盤の主体として考慮したか

らである。これに対して、前期以外の時期も含むが、三河宮の下遺跡で出土した石器を見ると、石鏃や石錘が大部分を占めている。このため、三河宮の下遺跡では、狩猟・漁撈活動が経済基盤の主体を占めていたものと考えられている^(注11)。志高遺跡で採集している石器も石鏃が主であることから、経済基盤の主体は三河宮の下遺跡同様、狩猟・漁撈活動に依っていたものと考えたい。前期の狩猟・漁撈活動のなかで、洪水の危険を顧みず、由良川に近接した微高地に集落を営んだのは、漁撈活動に重点をおいたと共に水上交通の利便を重要視したためと思われる。

4. おわりに

由良川下流域における縄文文化究明の幕明けから、ほぼ20年の歳月が流れている。その間、縄文土器の出土地点は10カ所を数えるまでに増大し、2遺跡については発掘調査によって縄文時代の遺構面を確認した。この発掘調査により研究の視点は、資料採集の段階から生活内容の解明の方向へと大きく進展してきている。

今回紹介した志高遺跡の採集遺物は、由良川下流域における縄文文化がかなり早い時期から花開いていたことを物語る資料である。志高遺跡ではこれまでに前期の縄文土器が採集されたことがなかった。このことは、由良川下流域における縄文時代の遺構面が地表下数メートルの所に存在していることに起因するものと思われる。河底を除けば、遺物が採集されることはほとんどないためである。このような状況のなかで、遺跡が残されているとすれば、このうえなく良好な状態で保存されている可能性は十分に考えられる。志高遺跡のような未発見の遺跡は、まだ数多いのかもしれない。

由良川下流域における縄文文化の究明は、まだその緒についたばかりである。今後の調査研究を見守りながら、由良川下流域における縄文文化を見極めてゆくことにしたい。

(三好博喜＝当センター調査課調査員)

注1 小江慶雄「舞鶴市八雲地先由良川河底出土の先史遺物について」(『京都学芸大学紀要』21) 1962

注2 a 杉本嘉美「由良川より採取した古代文化遺物について」(『舞鶴地方史』8) 1968

b 杉本嘉美「由良川より採取した古代文化遺物について」(『両丹地方史』10) 1969

c 天野末喜・神尾恵一「京都府由良川流域における縄文文化一分布調査による報告1ー」(『同志社考古』8)1971

d 杉本嘉美「由良川より採取した古代文化遺物について」(『舞鶴地方史研究』19・20) 1975

e 渡辺 誠ほか『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975

f 加佐郡大江町梅ヶ平遺跡では、数多くの石鏃が採集されており、1973に発掘調査が行われた。しかし、石鏃が出土しただけで、土器は確認されていない(注4に詳しい)。

- 注3 注2 eに同じ
- 注4 中谷雅治ほか『高川原遺跡発掘調査報告書』大江町教育委員会 1975
- 注5 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊-1 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注6 a 杉本嘉美『京都府舞鶴市志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981
b 吉岡博之「志高遺跡一昭和56年度花ノ木・スドロ葎下地区および久田美地区の調査概要一」(京都府舞鶴市文化財調査報告第6集 舞鶴市教育委員会) 1982
c 吉岡博之・西岡成郎『志高遺跡一昭和57年度カキ安地区の調査一』(京都府舞鶴市文化財調査報告第4集 舞鶴市教育委員会) 1983
d 吉岡博之『志高遺跡一昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要一』(京都府舞鶴市文化財調査報告第7集 舞鶴市教育委員会) 1984
e 岩松 保「志高遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』16 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注7 山下 正・肥後弘幸『志高遺跡』(京埋セ現地説明会資料No.86-01 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注8 参考文献
a 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊) 1935
b 岡田茂弘「縄文文化の発展と地域性一近畿」(『日本の考古学Ⅱ』縄文時代) 1965
c 帝塚山大学考古学研究室『京都府丹後町平遺跡調査概要』(考古学シリーズ1) 1966
d 藤田憲司・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」(『倉敷考古館研究集報』11) 1975
e 泉 拓良「西日本の縄文土器」(『世界陶磁全集』1 日本原始) 1979
f 網谷克彦「鳥浜貝塚縄文時代前期土器の研究(Ⅰ)」(『鳥浜貝塚1980年度調査概報』福井県教育委員会) 1981
g 土肥 孝「近畿地方」(『縄文土器大成』1 早・前期) 1982
h 網谷克彦「北白川下層式土器」(『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ) 1982
- 注9 注2 cに同じ
- 注10 注2 eに同じ
- 注11 注5に同じ